

館蔵資料紹介 No. 7

明治・大正・昭和期教育関係新聞雑誌
完全復刻版コレクション

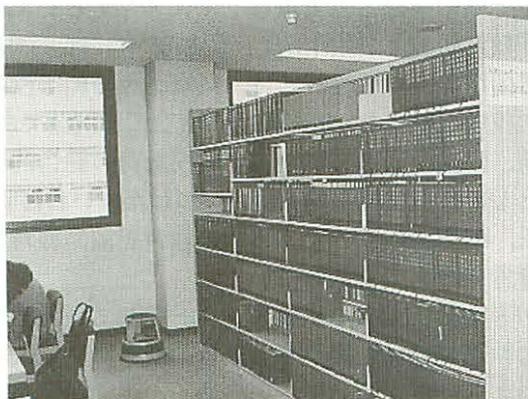
梶山 雅史

本コレクションは、明治、大正、昭和三代にわたる教育思想、教育実践さらに時事問題をめぐる世論の動向など、大量の教育情報を収載した9種の新聞雑誌資料からなっている。

文部省から大型コレクション特別購入費639万円を得て、平成3年12月に整備をおえ、本館に開架式で架蔵されている。

まず、コレクションの構成と刊行年代を紹介しておこう。

『教育報知』(明治18年-37年)	34冊
『教育公報』(明治29年-40年)	11冊
『教育学术界』(明治32年-大正元年)	49冊
『帝国教育』(明治42年-昭和7年)	142冊
『教育問題研究』(大正9年-昭和8年)	59冊
『教育の世紀』(大正12年-昭和2年)	17冊
『教育週報』(大正14年-昭和19年 但し昭和7年-13年は除く)	13冊
『全国小学校連合女教員会雑誌』(大正14年-昭和18年)	19冊
『教育研究』(明治37年-昭和25年 但し昭和16年-21年までは休刊のため除く)	83冊
復刻製本版 総数	427冊



これらは、いずれも各時代を代表する有力紙誌であり、日本近代の教育の歩み、その曲折・明暗を如実に伝える貴重な資料群である。

ご存知のごとく、日本の教育は明治初年以來、欧米教育思想の導入、天皇制教育の成立、大正デモクラシー下新教育運動の展開、戦時教育の進行、そして戦後新教育への転換と、二転三転する大きなうね

りを経て、いままた第三の学制改革と呼ばれる教育システムの改変が進行しつつある。

時代の転換を前にして、これらの新聞雑誌に刻まれた教育の姿は、我々にじつに多くの事を語りかけてくる。これらの新聞雑誌を総体として眺め、問いかけていくなれば、日本近代教育の意味と現在の位置がかなりのところまで明白になってくるにちがいない。

ここで資料としての新聞雑誌について、コメントしておこう。

一昔前ならば、著名な人物の著作や研究機関の調査資料あるいは古記録、古文書類といった文献が尊重され、このような新聞雑誌を大金をはたいて収集することに首をかしげる向きが少なくはなかった。

しかしながら、考現学や社会史研究が浮上しつつある今日、新聞雑誌を学術研究の対象とすることへの抵抗、非難はもはやなくなったといえよう。むしろ、日本の近・現代を研究するには、新聞雑誌は不可欠の資料であるとの認識が一段と深まっている。

吉野作造の見識、宮武外骨の執念、瀬木博尚の篤志によって、昭和2年(1927)、東京帝国大学法学部に設立された明治新聞雑誌文庫については、すでに多くの方がご存知であろう。宮武外骨が着手し、そこに蒐集された膨大な新聞雑誌は、今日、類例のない貴重史料、近代史研究者の宝庫として、ますますその声価が高まっている。

「偏った学説に歪曲された論文よりも『生ま』に時代の空気が伝わってくる新聞、雑誌にこそ真の意味の資料性がある」(吉野孝雄著『宮武外骨』)。この名言は、私にとっても、明治新聞雑誌文庫に足を運ぶ度に嘯みしめる鮮烈な実感であった。

発行部数の多さ、また製本、紙質の面からも、いっばんに新聞雑誌は、格別に保存されることは稀である。大半はつぎつぎと廃棄され、またたくまに散逸の運命をたどっていく。バックナンバー全冊の現物に接することは、実に困難となっている。

本コレクションの原版も、明治新聞雑誌文庫の世話になったものが少なくないと聞く。

教育学関係の学会で、新聞雑誌資料の重要性が自覚されはじめ、教育雑誌の復刻作業がいくつかの出

版社によって手掛けられはじめて、ともあれ十数年が経つ。全国の所蔵機関に問い合わせ、複製許可をとり、書誌的吟味を重ねて、全巻復刻を実現するには、気の遠くなるような苦労があったに違いない。貴重な教育雑誌・新聞の完全復刻版の完成は、まことに有り難いことである。とはいえ、復刻限定セットは廉価ではない。

平成3年度大型コレクションに採択され、本学に9タイトルの主要な完全復刻版コレクションが一举に揃ったのは、実に幸運であった。

5年前、本コレクション申請時に作成した理由書は、大仰な文体で気恥ずかしいのだが、その一節につきのように記した。

「教員の資質、能力の向上という今日的重要課題にかかわって、教育研究者間では、近代日本の学校教育発足以降、現代に至る教育遺産の歴史的また理論的検討が不可欠の基礎作業となっている。左記の貴重な資料が本学に蔵置されることによって、本学内外の研究者による各教科教育の研究ならびに教育内容、方法等をめぐる多様な共同研究の推進が可能となる……」。

明治6年(1873)設立の師範研習学校にはじまる本学の教育学部は、このたび、平成7年4月に大学院教育学研究科修士課程の設置となった。この間、教科教育学をはじめ関連分野の研究者、学生に多く活用していただけたのは実に嬉しいことであった。そして大学院学生にとって本コレクションは、教育研究情報の宝庫となるにちがいない。論文作成の資料源として大いに活用していただきたい。

大学院教育学研究科の発足を記念して、今回、「館蔵資料紹介」に、本コレクションを紹介することとなった次第。今後、刊行されつつある貴重な復刻教育雑誌を加え、本コレクションのいっそうの充実を願ってやまない。

以下、紙面のゆるすかぎり、簡略ながら諸誌の特質について紹介しておきたい。

明治18年創刊の『教育報知』は、同年に発刊された『教育時論』と双璧をなす近代教育ジャーナリズムの一方の雄というべき教育雑誌である。報道、評論を重視して編集されており、教育情報媒体として明治中期の教育界に大きな機能を果たした。

『教育公報』(明治29年-40年)と『帝国教育』(明治42年-昭和7年)は、戦前最大の教育団体である帝国教育会の機関誌である。教育学説、教育上の諸問題について、「著名人の論稿を数多く掲載している点で異彩を放つ」ものといえる。

『教育学术界』(明治32年-大正元年)は、早稲田、慶応、東京高師さらには帝国大学におよぶ編集陣によって編纂が受け継がれ、誌名が示すように学術性、理論性の高さに本領を發揮した。

『教育問題研究』(大正9年-昭和8年)は、沢柳政太郎、小原國芳ら成城学園同人の機関誌であり、大正デモクラシーの土壌から、リベラルな新教育の潮流を代表し、新教育の理論と実践の実体を克明に伝え、大正~昭和初期にかけて全国教育界に大きな影響を与えた。

『教育の世紀』(大正12年-昭和2年)は、大正末期に教育改造運動の推進を目的として設立された教育の世紀社の機関誌であり、同時代のリベラリズムの頂点を担った教育雑誌である。児童の村小学校の準機関誌的役割も兼ねていた。

『教育週報』(大正14年-昭和19年)は、「新聞より正確に、雑誌より広く敏速に」をスローガンに、為藤五郎が創ったわが国最初の週刊教育紙である。収録記事の豊富さと幅の広さは、内外の教育動向を敏感に伝え、他の雑誌や機関誌の追随を許さぬものであった。人物、学校、教育団体、政府にたいする評価、事歴を通しての教育動向の把握、掲載はまさにこの週報の独壇場であったと評されている。

『全国小学校連合女教員会雑誌』(大正14年-昭和18年)は、大正13年に帝国教育会の肝煎りで結成された全国小学校連合女教員会の機関誌である。女性教師の地位と教育力量の向上をめざした当時の女性教師たちの運動、さらには戦時体制に組みこまれていく様相を録した貴重なドキュメントといえる。

『教育研究』(明治37年-昭和25年)は、国定教科書使用実施の明治37年に、東京高等師範学校附属小学校に組織された初等教育研究会の機関誌である。戦前、戦後を通じて、全国小学校教育の総合的啓蒙誌として、指導的立場を保ちつづけた。いわば明治、大正、昭和三代にわたる日本の教育思潮、教育実践の背骨そのものを示している。

初等教育研究会の主要メンバーとして理科教育分野に執筆し続けた棚橋源太郎は、岐阜師範学校に学び、さらに東京師範学校を卒業し、明治29年から4年間、岐阜県師範学校で教鞭をとり、その後、東京高等師範学校教諭さらに教授となった人物である。

棚橋源太郎を介して岐阜と東京を結ぶ教育情報回路のありようは実に興味がつきない。

(かじやま まさふみ:教育学部教授)
(本図書の配置場所:3階開架コレクションコーナー)